

集

俳句フォーラム

2019年1月 第70号

白山句会

青田駅

平野無石

遠野路の河童伝説秋桜
青田まぶし白内障の予後の朝
塞翁が馬の半生新酒汲む
炎天や球児にもらう応援歌
長靴も傘も貸します青田駅

梅干

植木やす子

炎天や目的地まで遠かりき
放たれし子等の声高尚暑し
大仏顔に金箔実梅落つ
梅干一個かかさぬ朝餉夫元氣
やぶ蘭も水引も咲くオフィス街

イルカショー

都築繁子

ジャンプしてイルカのさがす夏の海
甲子園の土持つ球児夏果てる
秋立つや老いの暮しを軽くする
蛙にも骨格しかと秋澄めり
ビル街の森石垣にある秋意

大手町の森

田中藤穂

秋の風大手町に森出現す
髪に惨む秋雨森の香をふふむ
藪蘭の花むらさきに秋の雨
団栗をこぼして大手町の森
推敲のペン動かして秋暑し

夫老ひぬ

工藤はる子

夏帽子の夫老ひぬその影までも
掌の中で海の気を吐く鮑かな
敗戦記語り尽くせぬ八十路かな
ビル街の雑木林や秋の雨
えのころ草母の荒れた手笑ひ顔

山王祭

篠田純子

日枝祭り白き神馬の目の優し
鳳輦待つ行幸通り地ぼてりす
盆僧に席譲らるる山手線
夏休み口開けて見るイルカショー
秋立つや右も左も転びあざ

黙

大山夏子

水族館に子等の喚声夏休み
みんなの鳴き急ぐわが誕生日
露草や駅前広場昼の黙
木の実落つ人無きベンチにも一つ
新涼や終活は物捨てること





夕焼け

渡辺節子

夕焼けや誰に祈るか無縁仏
海燃やすラバウルの空大夕焼
草原の夏は幽かそけし馬頭琴
敗戦日浮浪児思う猛暑かな
朝顔市江戸っ子言葉に耳そばだて

無

大山夏子

梅雨出水音沙汰の無き旧き友
暑中見舞葉書何枚無駄にして
扇風機日がな首振る無表情
冷奴自由不自由わがものに
秋扇たたむ仕草も親ゆずり

濁り酒

中川のぼる

わくら葉や無念と悔いの絡み合い
鬼灯の宇宙のなかの真理かな
身に入むや自戒の念は杳として
酔うほどに憂いは失せず秋深し
濁り酒仕事に興味と言ひし過去

ちちろ

江口九星

あざもなく生きて今年もちちろなく
蝉声や自給自足で不自由なし
炎暑なか羽を広げて蝶の飛ぶ
自治会の努力はなやぐ盆踊り
事も無げに水面歩くあめんぼう

晩夏

伊藤昌枝

国道の先へ先へと夾竹桃
日本海を染める夕日や玫瑰も
緒の火星晩夏の闇を深めたり
袖通す仕立直しの秋裕
仕込樽に匂うひしおや秋の風

光年の風

楠本和弘

雷や切り裂く馬房柵の闇
光年の風連れて来る秋茜
夜の山車のの字残せし轍かな
雲白し川瀬に舞ふや鬼やんま
魯田や星の寝言を聞き流す

敬老日

吉宇田麻衣

酷暑来て外出避けてやり過ごし
炎 昼 や 清 流 求 め 急 支 度
甲子園タイプブレークにおもう夏
かみ合わぬ夫婦の会話夜の秋
役割を自問自答の敬老日

試練

渡部恭子

大の字の昼寝や児の夢無限大
二歳児の自我すくすくと立葵
葦簾張りヨガ式呼吸で無我になる
星祭 自分探しの短冊も
超えられぬ試練は無しと雲の峰

菓子パン

小沢えみ子

香水の残り香よどむ一号車
秋暑かな買い物袋どさと置く
灯明の微かに揺れる秋少し
秋驟雨仕舞い忘れた三輪車
菓子パンの並ぶ自販機獺祭忌

新松子

酒井たかお

西瓜の子そつと顔出す葉陰より
無下なるや蚯蚓干からぶ遊歩道
銀漢の逢引き月も目を伏せて
傷つきしまリアと盆の長崎で
新松子いやいや仕草反抗期

円の会

安らぎ

山田邦彦

帰宅路の歩幅のゆるみ青田風
うたた寝や蚊取線香ゆらり揺れ
空に入るファウルラインの白涼し
広々と秋風なりし夕あかね
柿紅葉実家に帰る仕度して

空から色

若泉真樹

踏ん張って仁王のにらみ梅雨明ける
空から色棚田を抜ける大南風
夏の霧消えては現るる朱の鳥居
見霽す灘の夕焼山下る
自棄酒と言いつつ語る夏の星

花火

石川東兎

新しき並木の夏の木陰かな
甚平の瘦躯が風を通り抜け
詔勅や卒寿に重き敗戦日
花火果て天城にかかる赤き星
沢庵に清酒一合銷夏夏かな

再会

大山夏子

どくだみの無数の十字友転居
風と抜ける上野の森の秋めいて
法師蟬初鳴き美術館出でて
海牛の角は名ばかり一寸や
吾亦紅夢で再会尾瀬ヶ原

幻想

日置湊魚

徒然の旅は幻想冷奴
大暑かな己れに律することひとつ
涼風や手足の機嫌良き日なり
とめどなき話の継穂柚子絞る
残暑厳し籠りて好機とり逃がす

更衣

仁上博恵

更衣纏めて捨てる鬱の種
メールから読み解く秋の深い闇
昼のビュッフエ喋りまくって梅雨明け
アガパンサス闇歩の響き官庁街
思い出を根こそぎ解体蟬時雨

日陰

重原爽美

新らしき風を通わせ日陰の座
片蔭を松に貫ひて一休み
公園をひとりじめして蟬時雨
折角に咲きたる蓮の且つ散れり
太陽に捧げて蓮の輝ける

天

小笠原妙子

天と地の叫ぶ豪雨や水無月の
睡蓮の池の余白に天の青
朝顔の藍鮮やかな朝かな
カンナ燃ゆ郷を出てより道遠し
長生きのためのリハビリ生身魂

星月夜

三羽永治

江戸切子注ぎし酒や涼新た
時惜しむ野路の露草きらめきて
星月夜ランプの宿のランプ消し
鴉鳴くビルの谷間の木守柿
野菊濃し手を握り合ふ道祖神

まぶしき浴衣

治部少輔

あらかわい振りむく蜥蜴と目が合うて
バンカーを渡りきる青大将の蛇行
暮れなずむ五十路まぶしき浴衣かな
竹の春旅に出るかとさんざめく
芋殻焚く孫らは家路につきしころ

朝逝く

中山未奈藻

蝸を夕べに聞いて朝逝く
芦ノ湖にシャンソン夏の霧流る
アキレス腱の存在を知る極暑
七夕に願う事故など無きように
モルヒネに躊躇と感謝星月夜